

親の孤立、虐待どう防ぐ

西区・2児遺棄 地元市民団体がシンポ

大阪市西区のマンションで幼い姉弟2人が遺体で見つかった事件を受け、自殺防止活動をする市民グループ「関西生命線」(大阪市西区)は19日、同市北区の市立総合生涯学習センターで、公開シンポジウム「大阪市西区の虐待ケースを通じて、改めて援助の仕方について考える」を開いた。

同生命線は事件の起きた西区を拠点に活動しており、「身近な問題として事件をどのように受け止め、教訓とすべきかを、市民と一

緒に考えたい」と企画した。シンポジウムには、市民ら約50人が参加。冒頭の基調講演で、山縣文治・大阪市立大教授が事件の概要や児童相談所の職務について説明し、「児相がなぜ立ち入り調査や強制的な臨検をできなかったのか。法の改正も含め、我々に何ができるか、議論を深める必要がある」と提言した。

パネルディスカッションでは、元家庭裁判所調査官の橋本和明・花園大教授が、今回の事件の原因であるネグレクト(育児放棄)について「親のどなり声が聞こえず、子どものアザも見つからず、兆候をつかみにくい。身体的虐待などは違った対処方法が必要だ」と説明し、伊藤みどり・関西生命線代表は「孤立する親を、周

囲がどう支えていくかが重要」などと語った。